9 奇現象

キリストの聖骸布とUFO

イエスは地球人でなかったのか!?
コンタクティー等が語る真実とは

◉久保田八郎

聖骸布の歴史

二〇〇〇年前、エルサレム郊外のゴルゴタの丘で一人の偉大な男がこの世界から姿を消した。というよりも磔刑という残酷な方法で消されてしまったのである。その名はイエス。ナザレの出身で、出生から成年期にかけては謎だらけであり、唯一の伝記たる『新約聖書』も真実を記録したとは思えぬような美化された個所が多くて、ノンフィクション・ミステリー研究家を戸惑わせるのに、これ以上の人物はいない。

その誕生もさることながら、死亡時やその後の描写も神秘的であり、どこまでが本当なのかフィクションなのか見当のつかぬ記述に満ちているのだが、後に確立されるキリスト教の神学思想とは別に、このイエスなる人を実在した歴史的人物とみなすことにして福音書を丹念に調べてみると、まず間違いないと思われるのは、大祭司の部下どもがイエスを捕えて、これを反逆者としてローマの総督ピラトに引き渡し、ピラトが群衆の騒ぎに押されて、やむなく十字架にかけたという個所だ。その最期についても、イエスが神にむかって恨み言を述べたというはなはだ矛盾する記述があるだけで、具体的にどのような処刑をされたのか判然としない。したがって聖書による限りでは、十字架上で言語に絶する苦痛にさいなまれながら息絶えたらしいという憶測の域を出なかった。だいいちイエスという人物の存在すら疑惑の目で見る学者も何人かいた。あれほどの知名度がありながら当時のローマ側の記録にまったく残されていないのだ。

ところが近年になって重大な〝物的証拠〟が脚光をあびるにおよんで、イエスなる人物像が明白化してきた、と思われだした。それはイタリアのトリノの洗礼者聖ヨハネ大聖堂に安置してある聖骸布(せいがいふ)である。この聖骸布なるものもきわめて複雑な歴史をたどっており、その移動の跡も謎に満ちている。

イエスとは俗称で、正しくはヘブライ語でイェホシューアといい、これがギリシア語で音訳されてイエスースと呼ばれるようになった三〇歳代の男の磔刑直後の死体を包んだとされる布、すなわちトリノの聖骸布は、近代になって発見されたものではない。それは口碑により昔から伝えられていた。

紀元三〇年を少し過ぎた頃、エデッサ(現在の東部トルコのウルファ)の町の王であったアブガル五世のもとへ「謎の人物の肖像画が描かれている、どうもイエスらしい」といって大きな布を〝だれかが〟持ってきたのが歴史に顔を出した始まりである。

この王はイエスの教えを信仰して奇跡的に病気が治ったので、後にイエス崇拝者になったが、五七年に息子が王位を継承してからキリスト教徒を迫害したので、布は城壁の穴の中に隠された。以来五〇〇年近く伝説だけが流れて現物は幻と化したけれども、五二五年にエデッサが大洪水に見舞われて破壊されたため、再建工事が行なわれた。そのとき布が発見されて、以来、イエスの顔が描かれた聖なるものとして崇拝されたのである。イエスの顔を見たことのある人が描いたと思われていたらしい。

九四三年にエデッサはビザンティン軍に包囲されたけれども、住民はこの布を敵に差し出して虐殺をまぬがれた。そして一二〇四年まで布はコンスタンティノープルで保存されたが、一四六年の空白を経ていつのまにかヨーロッパのジェフリー・ド・シャルニという男の手に渡っていた。この時期(おおやけ)、つまり一三五〇年代が聖骸布として公に記録された最初である。

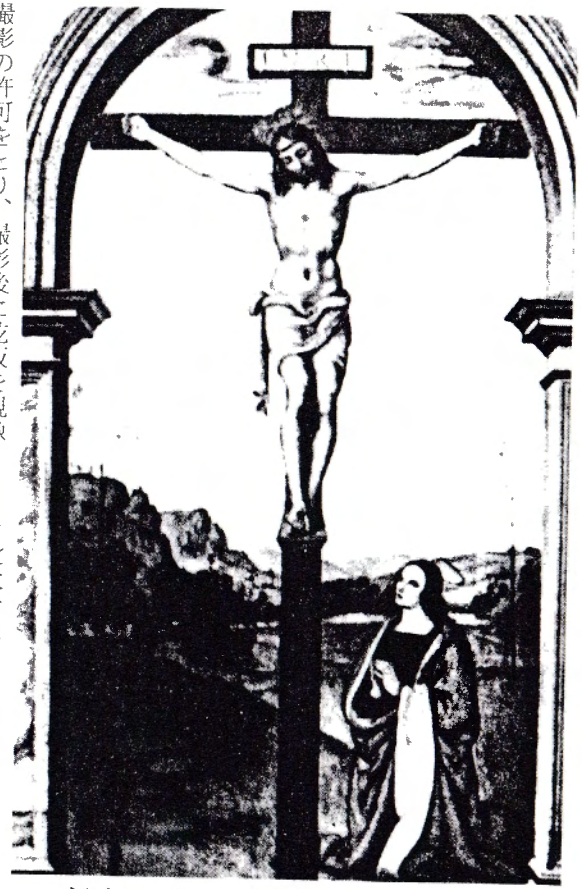
聖骸布はシャルニの孫娘マルガレの手に渡り、金に困ったマルガレはこれをサヴォイ公に売った(寄贈したという説もある)。サヴォイ家は一一世紀のウンベルト一世が始祖となって以来イタリアに君臨した王家である。一五三二年には火災で布の一部が損傷したが修復されて、管理を厳重にするために一五七八年サヴォイ家は布をトリノの洗礼者聖ヨハネ大聖堂内にあったサヴォイ家の礼拝堂に収めた。それ以来、布はそこに保管され、「トリノの聖骸布」と呼ばれて、一〇〇年に四回の割で一般に公開されてきたのである。

聖骸布の科学的調査

幅一・一メートル、長さ四・四メートルもある細長い亜麻布はかなり古びて黄色くなっているが、ボロボロの状態ではない。縦に伸ばして広げると、両端にそって縦二列に三角形の図形のついた模様が見られ、そのあいだに一人の男の正面と背面の像が、布の中心部から上下に黒っぽく浮き上がっている。つまりこの布は磔刑後に二つ折りにされて、折り目の方へ死骸の頭をはさみ込んで全身を包んだと思われるのである。両手は下腹部で交差している。

ところが一八九八年に劇的な大発見が行なわれた。イタリアの弁護士で考古学写真家セコンド・ピアが史上初めて写真

撮影の許可をとり、撮影後に乾板を現像したところ、なんとそのネガに荘厳な顔つきをした人物の像が鮮明に浮かび上がったのだ！　いいかえれば、布に出ているだれの目にも見える黒ずんだ奇妙な像は写真でいうとネガに相当し、撮影した写真のネガに現われた像がポジになったというわけである。



イタリアのトリノにある洗礼者聖ヨハネ大聖堂の聖骸布がこのイエス・キリストの実在を証明するのか？

これは大センセーションをまき起こした。いままで画家の手になる画像と思われていたものが、一転してイエス・キリストの体の聖痕（せいこん）ということになり、学界で大論争の的となったのである。

まずフランスの有名な医学者であるイヴ・ドラージュ博士が調査して、その結果を一九〇二年にフランス科学アカデミーで発表したのを皮切りに、本物説と偽物説との激烈な論争が展開された。

ドラージュ博士は、像の男が激しい拷問を受けて、頭部がひどく殴打され、鼻は折れるなど、ひどい状態のまま十字架にかけられた跡があると断定し、これを本物と主張したが、同じ医学者のポール・ヴィニョンは、人間の汗と香料で描かれた偽物であると断じた。

一九三一年にはイタリアのすぐれた写真家ジュゼッペ・エンリエが、進歩した原板を使って布の写真を撮影し、それを最大限に引き伸ばした結果、布地には染料の跡はないと断言した。

しかし科学者による本格的な調査は一九五九年に始まっている。この年、ドイツ人科学者団による顕微鏡検査、X線、赤外線、紫外線検査が行なわれたのだが、いま一つ決め手を欠いた。考古学で応用される放射性炭素による測定がなされなかったからだ。この測定には布の一部を切り取る必要がある。そこで科学者団は、ときの法王ヨハネ二三世に請願した。しかしトリノの大司教はなぜか却下したのである。

ところが一九七〇年代なかばにアメリカ空軍の科学者ジョン・ジャクスン博士がVP―8と呼ばれるコンピューター画像分析器に聖骸布のスライドをかけて調べてみた。この機械は惑星探査機が撮影した地球外惑星の地表写真を立体化させる機能をもつもので、宇宙開発の最新兵器である。ジャクスンは驚いた。聖骸布のなかから一人の男の立体像が浮かび上がったのだ。

このため一九七八年一〇月に四〇名からなる科学者団の大調査が実施された。このうち二五名はアメリカ人で、彼らは大聖堂内で五昼夜にわたって、あらゆる科学的なテストを行なった。そして大半の科学者は聖骸布が本物であることを確信するようになったのである。

像の顔面部のミステリー

その一人にサムエル・ペリコーリがいる。彼は宇宙探査機の打ち上げ計画に従事してきた科学者で、新しい亜麻布に人間の汗、オリーブ油、ロカイ、ミルラと呼ばれるアラビア・東アフリカ産の樹脂などをすり込み、それをオーブンで焦がして、トリノの聖骸布の完全な複製を作り出した。これにより布の像が画家によって描かれたという説は打ち砕かれたのである。

絵画説以外に、布が熱い彫像にかけられて像ができたとか、謎の核爆発の閃光をあびただの、汗の発散でできたとか、さまざまの説が流れていた。

しかしペリコーリは断言する。「あれは絶対に本物の肉体によって自然の経過によりできたものだ。描かれた偽物という可能性はない。描かれた像だとすればあれほどに正確な立体像を描ける人間が六〇〇年前にいたとは考えられない。したがって聖骸布はインチキではないが、像がキリストのものかどうかは別問題だ」

この聖骸布の像には大きなミステリーがある。ふつう人間の顔に塗料を塗り、それに布を巻きつけてから広げると、両耳までの部分は横に細長い楕円形に転写されるはずだが、聖骸布の顔はそのようなことはなく、人間の顔が立体的に浮き出ているのである。布は柔らかい物であるから顔面と後頭部だけに密着していたとは思えない。やはり両耳あたりまで巻かれたのであろう。しかし布面に浮き出ているのは顔面の像だけなのだ。この謎は解けない。もし描いたものとすれば解剖学に関する深い知識を必要とする。

磔刑された男の詳細

この調査によって判明した事実は、次のとおりである。

聖骸布の男の両手首に釘が打ち込まれた跡があった。その左手の傷跡から左腕に流れ落ちた血液の跡を調べると一〇度ずつ角度を変えている。これは男が十字架上で自分の体を持ち上げたり下げたりした事実を示している。つまり手首にかかる激痛を両足の激痛に移そうとしたわけで、両足にも重ねたままで釘が打ち込

聖骸布に現われたイエス・キリストと思われる人物像の顔面部。
左が布面に浮き出ている像で右はそれを撮影したネガ

れると中枢神経に接触するために親指が手のひらの内側へ収縮したと考えられるのである。実際に釘で打ちつけられたとすれば、中世以来の画家が描くような手のひらではなくて、手首であったらしい。

だが古代ローマの磔刑の方法として、罪人を長時間苦しめるために、手首や手のひらに釘を打ち込むことは避けて、両手首を七インチ釘でもってカスガイのように締めつけて体を横木に固定させる処置もとられた。これにより手首に体重がかかるために、皮膚が裂けて出血し、数時間後に絶命するという。

もし最初から手首に釘を打ち込まれたら、罪人は大出血ですぐに死ぬか、まず失神してまもなく死ぬだろう。体を動かすなど到底考えられない。したがって、両手首と両足に大釘が打ち込まれたという研究チームの報告には納得しがたいものがある。

聖骸布の徹底的な研究調査により判明した詳細は、次のようなものである。

男の身長は一メートル七六センチ、体重は約七九キロ、年齢は三〇歳程度。容貌はユダヤ人のそれであった。かなり頑丈な体格であったらしい。教会芸術に見られる痩せた弱々しいイエスの体とは似ても似つかぬ偉丈夫である。

口ヒゲとあごヒゲをかなりたくわえていた。

頭皮が破れて出血し、額と後頭部に血のしみがあり、鋭利な刃物で切られた跡が一二ヵ所はあった。

鼻は折れて、両目もはれあがり、まぶたも裂けていた。ひどく殴られたことは

明白である。両頬にも切り傷があった。

顔と手足以外の胴は無数の傷跡を示している。これは男の両側にいた二人の人間によりムチで打たれた跡らしい。鉛または骨を先端につけた二重のムチで、九〇回ないし一二〇回ほどのムチ打ちを受けたが、主として胸と腹とに集中していた。右側に背の高い男が、左側に背の低い男が立って、交互に打ったようだ。

聖骸布の男の両肩にひどくすりむけた跡が残っているが、これは重い物を運んだ結果と思われる。当時、磔刑の罪人は十字架の横木だけを刑場までかつがされた。イエスの伝記映画にあるように十字架そのものを運ばされたのではない。柱はすでに刑場に立てられていた。それにしても横木だけで四〇キロを超える重量はあったと考えられる。

ひざにもすりむけた跡があった。おそらく刑場に行く途中何度か地面に倒れたのだろう。

右脇腹の第五肋骨と第六肋骨のあいだに大きな傷口が認められ、血液と、刺されて流れ出た体液と思われる無色の液体のしみが聖骸布に残っている。

また両目にはコインがはめられていたことも判明した。これは死後硬直を防ぐために死体のまぶたにコインまたは薄い陶器の破片をはめ込むユダヤ人の習慣に従ったものだろう。死体を洗った形跡はない。だから布には血痕がしみ込んでいる。しかし、この血痕について重要な結果は出ていない。

花粉で判明した移動径路

それよりももっと重要なのは、この布に付着していた花粉類の検査から、布の移動径路が浮かんできたという事実である。

調査研究にあたったのは法医学の専門家、植物学者のマックス・フライで、彼によれば聖骸布から五六種類の花粉を発見したという。これは布に押しつけた粘着テープを剝がすことによってサンプルを採取し、これを電子顕微鏡で調べたのである。

それによると、この布はキリストの時代にパレスティナに存在し、後にコンスタンティノープルへ移動した可能性も示唆するし、死海やネゲブ周辺のパレスティナ地域からさらにヨーロッパにも移された形跡があることも判明した。以上の径路は聖骸布にまつわる伝説の正しさを立証することになる。

インチキ説をとなえる反対論者

いかなるミステリーにしてもそうだが、真相解明派の声明にたいして必ず反対派が現われる。

聖骸布についてもインチキ説をとなえる学者はあとを絶たない。近年もその派の大物として躍り出た人がいる。トップクラスの微量化学者ウォルター・マクローン博士がその人で、彼はピリ・レイスの地図を、一九二〇年代の偽造だと主張してセンセーションを起こしたことがある。

彼は粘着プラスターを用いて聖骸布から織り糸を採取し調査した結果、布の像の男は画家が描いたと断言したのであ

る。つまり絵の具に使われる媒体としての赤味がかったオーカーを発見したというのだ。

一方、トリノの調査団によれば、発見されたという鉄の酸化物のくず、すなわちオーカーは、きわめて微細なものなので肉眼では見えない。しかし布の像は肉眼で見えるのであるから、これは問題にならない説だと反発する。像は顔料によるものではなく、布のセルロース繊維の構造上の変質だというのだ。

マクローンのインチキ説は一時期世界に流されて、わが国の新聞にも掲載されたから、大方の読者はご記憶であろう。人間社会ではだれが何を言おうと自由なはずだが、こわいのは新聞記事をチラと読んだだけで読者の心に決定的な概念が植えつけられる例が多いということだ。もちろん、この場合はニュースの媒体たる新聞社に責任はない。

マクローン以前にもインチキ説をとなえた人がいることは前述のとおりだが、いずれが正しいかはだれにも断言できない。

アメリカの化学者ウィラード・F・リビーが一九四六年に考案した放射性炭素による年代測定法も絶対的に正しいとはいえないのだ。測定者によってはかなりの誤差が生じることもあるので、同一の試料を数名の人が分担して測定し、その平均値を出す方法がよい、とトリノ調査団の一人、ドン・デバンは言う。

この測定法にかけることは学界から望まれていたのだが、ローマ法王は容易に許可しなかった。

ところが一九八八年にやっとヴァティカンがヨーロッパの数ヵ所の研究所へ聖骸布の切れ端を送って放射性炭素年代測定を依頼したところ、なんと一四世紀の布だという報告が出たのである！　これはいったいどういうことなのか。

大母船内でイエスの映像を見る！

ここで超能力者として知られる秋山眞人氏に登場を願うことにしよう。

秋山氏は静岡県出身のまだ若い人だが、テレビにしばしば出演される方なので、ご存じの方も多いと思う。しかし氏の真骨頂はコンタクティー（異星人と接触した人）なのであって、氏は過去に多数のスペース・ピープル（別な惑星から来た人）と連絡していたばかりか、円盤や母船に乗せられて金星その他の別な惑星に行って来たという希に見る特異な体験をした人である。その詳細は筆者の『UFO――遭遇と真実』（中央アート出版社刊）に収録済みなので、ここでは省略するが、大気圏外に関しては驚くべき知識を持つ人である。

その秋山氏によれば、イエスは当時のコンタクティーであり、スペース・ピープルの壮大なスペース・プログラムに協力して任務を遂行した人であるという。

イエスに関して氏は筆者に次のように語ってくれた。

「イエスについては比較的小柄な人だったとスペース・ピープルからきいています。非常に広範囲なオールマイティーな能力を持っていた人です。

当時は権力闘争の強い時代ですから、武力闘争に強い者が勝ち残るという非常に混乱した世の中だったわけです。そうした時期にいわば地球世界を別な方向に切り替える役割を背負って出てきた人です。筋肉質の体格のがっちりした人だったそうです。顔は少しほっそりとした感じです。

イエスは行方不明になった時期がありますが、あのときは東洋へ旅をしたということです（注＝イエスは公生涯の始めにヨルダン川で預言者のヨハネから洗礼を受けて、三〇歳から公式に伝導活動を始めているが、それ以前の青年期に長年月、謎の失踪をとげている）。

その旅行期間中、東洋の各地をポイントをきめて歩いて、東洋の能力的に強い人たちとの接触を持ったわけです。

そして今後の世界がどういうふうに動いてゆくかということで話し合いをして、それから元の国へ帰って、ある意味ではスペース・プログラムにのっとった活動を展開したわけです」

――東洋のどこの国々へ行ったのですか。

「基本的には三ヵ所へ行ったと思われます。チベットは確実で、それとタイあたりではないかと思います。あと一ヵ所はエジプトです。エジプトでは長期間潜伏していたようです。そのときにも能力の強い人間と接触しています。

その当時にはすでに各国にスペース・ピープルと接触していたコンタクティーがいて、それらとの接触をしていたのかもしれません。そのネットワークの接点を求めて、自分が使命を帯びていることの自己確認をするために行ったと思われます。それと自分の能力向上を求めての研鑽と修行の目的もあったことでしょう。

キリストクラスになりますと、いながらにして世界のどこどこで、これからどういう事が起きてゆくのか、が予知できるわけです。それが予知できて、しかもそれを具体的に良い方向へ変えるためには、どうしたらよいか、この国ではこう

話題の文芸書

●好評"御三家シリーズ"第三弾！

御三家の反逆 上・下

南原幹雄

絶賛発売中

●四六判・上製
●定価各一、五〇〇円（税込）

将軍家光と尾張義直の激突！

徳川宗家を支えるため家康が創設した尾張・紀伊・水戸の御三家――。しかし家康の二男秀康がのこした『聖儒真秘録』をめぐり、家光と義直の対立は激化。凄絶な暗闘がはじまった……。

新人物往来社
〒100 東京丸の内3-3-1 新東京ビル

いう運動をしたらよいか、というようなことのバランスが分かるわけです。

そうした能力を完全にマスターして自分の国へ帰って十字架にかかったといわれていますけれども、これについては民衆の意識の力というものがあります。

それは大きな変革を迎えようとするときに、民衆の持っているカルマのネガティヴな部分、つまり膿が大きな形で出てくるわけです。それが通常ならば大きな自然災害になって環境に影響を与えます。

イエスの場合は、そうしたカルマの歪みみたいな物を彼自身が背負う形にして消したと思うのです。彼自身が十字架にかからなければ、ほかの民衆が大量に死傷するような事が起こったでしょう。それが彼の役割だったし、行動の原点というか目的だったわけです。

そこで民衆の切り替わりが起こって、彼もスペース・ピープルからの援助で早速復活する（生き返る）というわけです」

――イエスが墓に入れられた翌朝、マグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行くと、大きな地震が起こって、主の使いが天から下って来た。それが石を脇へころがした。その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように白かったと新約の「マタイ伝」にあります（似たような記述がマルコ、ルカ、ヨハネによる福音書にも見える）。この不思議な人物は異星人で、その人が特殊な方法でイエスを生き返らせたのではありませんか。

「そうです。ですからイエスの再生ということに関しては、異星人が異例の処置をとったのです。強いパワーを彼に与えるということをやったわけです。

歴史的には、異星人が一個人にたいして物理的な力を使ったというのは、ただ一度の例外というか、行動だったのではないかと思います」

――聖骸布の研究によれば、イエスはかなり大柄な人だったということになるようですが――。

「比較的小柄な人だったと聞いています。身長はそんなに高くはなくて、肩幅は非常にがっちりとした筋骨隆々たるタイプで、顔はほっそりした長めの顔だったと聞きました。聖骸布の場合は染みだし効果のためにパターンが大きくなった可能性があります。あの聖骸布の像で正確に身長を測ると、かなり大柄な人になるかもしれません。

私は一度（別な惑星から来た）母船の中で、生存中のイエスの顔を見せられたことがあります。それはたいそう不鮮明な像で、完全なムービーではなくて、少しずつ動いてゆく感じの画面でした。ちょうどフィルムのコマ送りが遅くなったような感じです。

それは少し球面になったスクリーンに浮き出した画像で、どっちかというとビデオを見るような感じです。動きはスムーズではなくて、不鮮明で、色も淡い感じでした。しかし聖骸布に出ている顔と全く同じでした（と語気を強める。文中の傍点は筆者による）。

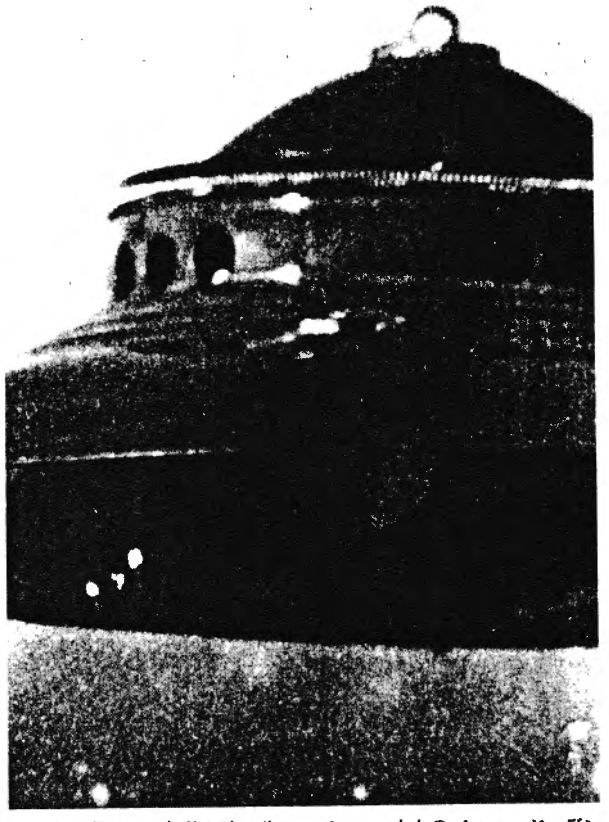
そのときにイエスが手を振る光景が見えたのですが、指は長くて、ふしくれだった感じでしたね」

――それはイエスの存命中の姿をスペース・ピープルが何かの方法で撮影したものですか。

「そうだと思います。たぶん何かの方法で記録されている映像でしょう。

ですから、スペース・ピープルに協力した地球人たちの行動パターンから遺伝子のパターンなど、膨大な記録がしまわれているわけです。それを非常に小さなフロッピーみたいなカードみたいなものに全部記録するんです。

イエスがどのように生まれ変わっていったか、存命中の彼の使命がスペース・



1952年12月13日，午前9時10分に，パロマー山上のパロマーガーデンズ台地でアダムスキーが撮影した金星の円盤。直径は約9メートルある（日本GAP）

話題の文芸書

●徳川幕府の遺産をめぐる"秘宝"シリーズ第三弾！

小栗上野介の秘宝

典厩五郎

絶賛発売中

●四六判・上製
●定価一、四〇〇円（税込）

陸軍省を舞台にした贋札・汚職事件と小栗上野介が秘匿したといわれる徳川家の財宝をめぐって繰り広げられる明治政界の暗闘――。気鋭が描く渾身の歴史ミステリー！

新人物往来社
〒100 東京丸の内3-3-1 新東京ビル

ピープルとのあいだでどのように取り決めされていたのかということは教えてもらえませんでしたがね。

これは現在も進行している問題です。特にキリスト教圏ではいろんな意味でキリスト教の教えがどうあるべきか、イエスが本当はどのように説いたのかということは、政治問題にもつながる非常に重要なことです」

ところで、前述の放射性炭素年代測定によって、聖骸布が一四世紀のものとされた件について秋山氏は、カトリック内部の対立からくるトラブルのために情報工作が行なわれたのだろうという。つまり本物であるのに、わざと偽物だという情報を流したというわけだ。これで何らかのケリをつけたものと思われる。

もう一人のコンタクティー、アダムスキー

ここでもう一人の代表的コンタクティーとして知られるアメリカのジョージ・アダムスキーについて述べておく必要がある。

アダムスキーもスペース・ピープルと接触した人で、その膨大な体験記は『新アダムスキー全集』全一〇巻（中央アート出版社刊）として刊行されているので、詳細はそちらにゆずることにして、全集第一巻の『第二惑星からの地球訪問者』によると、「地球人のなかで生活するために他の惑星から地球へ人が来るようなことは長く行なわれてきたのか」というアダムスキーの問に答えて、異星人の婦人が少なくとも過去二〇〇〇年は続いていると述べてから、次のように言っている。

「地球人を助けるためにあなたの世界で生まれ変わるように送られてきたイエスのはりつけ以後、地球で生まれ変わるよりも、関係者にとってもっと危険の少ない方法で使命を遂行するようにきめたのです」（同書二〇六頁）

これからみると、イエスはあきらかに別な惑星から地球へ転出して（生まれ変わって）きたことになる。ただしこの書では出身惑星が明確ではない。

この件については、アダムスキーを支持する世界的なグループであるGAP網でも重視していた。キリスト教では、イエスは天国の神から地上へ遣わされた一人子だというらしいが、アダムスキーによればもっと現実的な意味合いを帯びることになる。そして、何よりも、われわれの太陽系には一二個の惑星があり、そのどれにも高度に進化した人類が住んでいて、科学的にも精神的にもわれわれの想像を絶する大文明が存在しているというのである。地球だけが戦乱に明け暮れする最低の惑星だという。

こうなるとアダムスキーの説の信憑性が問われることになるだろうが、大方の地球人はこれを妄説として否定するのが現状である。

実証されつつあるアダムスキーの説

しかし戦後、世界的に「有名」になったUFO（未確認飛行物体）なるものが、実は別な惑星から来る宇宙船であるという説がしだいに有力になりつつあるし、

しかも別な惑星に偉大な文明が存在することを米ソ等の大国政府は突き止めていながら、これをひた隠しにしているという「事実」が明かるみに出つつあるのだ。

たとえば、日本人で科学コンサルタントの仕事をしているM氏は、昨年、アメリカのNASA（米航空宇宙局）へ行ったとき、一九六〇年代から七〇年代にかけて行なわれたアポロ計画で月面に到着した宇宙飛行士が撮影した、なんと月面上に別な惑星から来たと思われる巨大な母船や円盤群が存在している極秘の写真類を見て驚愕したという。本人はそれまでUFOを全く信じていなかったが、それ以来、百八十度認識を改めたというのだ。

すでに異星人は月面を基地にしていたのである。これはアダムスキーがとなえていた月面異星人基地説を裏書きすることになる（『第二惑星からの地球訪問者』）。

この異星人たちはどこの惑星から来たのか？　わが太陽系中の惑星群であることは間違いなかろう。NASAの隠蔽説は正しかったのである。アダムスキーの別な惑星に関する記述も正しかったということになるし、秋山氏の宇宙的な体験もすべて間違いなかったことになる。

結局、アダムスキーや秋山氏らが早くから主張していた別な惑星の偉大な文明存在説に関しては、しだいに実証される方向にあるのだ。

イエスとスペース・プログラム

大昔から別な惑星の人々によって地球を救済する活動がひそかに実施されてきた。それをスペース・プログラムとコンタクト派の人たちは呼んでいるが、このプログラムは『旧約聖書』にも明確に実例が記述されている。

たとえば「エゼキエル書」の第四節には、周囲に大いなる琥珀色の火の雲をもって北から来た旋風として描写された一個の機械の説明がある。その内部には人の姿をした四つの生き物がいたとあるが（第五節）、これは古代に地球を訪れた宇宙船であったと、アメリカの科学者プラ

話題の文芸書

鬼官兵衛烈風録

中村彰彦

絶賛発売中

●四六判　定価一、六〇〇円（税込）

我ら賊徒なるか
会津を率い戊辰戦争を戦い
オニカンと呼ばれ怖れられた
男――佐川官兵衛
その苦闘の生涯を渾身の筆で
描く傑作歴史長篇！

新人物往来社
〒100 東京丸の内3-3-1 新東京ビル

ムリッチは断定している。つまりエゼキエルは古代のコンタクティーなのであって、「エゼキエル書」はまぎれもないコンタクト実話であったというのである。

あるいはモーゼのエジプト脱出時に、昼は雲の柱、夜は火の柱となって、ある巨大な物体がモーゼとイスラエルの大部隊を導いたと「出エジプト記」にあるが、これも別な惑星から来た大母船を意味すると思われる。

いわゆるUFOと呼ばれる物体は、船体が人工的なフォースフィールドで包まれているために、これが夜間はイオン化現象により発光し、昼は雲のように見えることが多い。モーゼの場合も典型的なUFOの出現であり、彼もコンタクティーであって、彼は接触した異星人を「主」と表現したと思われる。

ジョージ・アダムスキー（日本GAP）

イエスもまぎれもなくコンタクティーであった。異星人と連絡をとりながら壮大なプロジェクトの重責を果たしてゴルゴタの露と消えたと思われているが、実は仮死状態であった体を、夜間ひそかに白い服を着た異星人が墓へやってきて、特殊な機械でビームを放射して生き返らせたということらしい。

だが、イエスは後世キリスト教という宗教の教祖に祭り上げられた。彼が説いた深遠な宇宙的哲学は理解されず、教会の祭壇の十字架に貧弱な体の彫像がぶら下げられて偶像崇拝の対象になった。

太陽系の別な惑星群に偉大な文明が存在することは、来世紀になって一般的な知識になると思われる。

筆者の予測では西暦二〇二〇年から三〇年頃に大国政府がその事実を公表するとみていたが、もっと早くて、二〇一〇年頃という信ずべき情報がある。そうなれば地球人の価値観は大転換し、一時期の混乱を経て、地球の文明は飛躍的に進歩するだろう。そして真の意味の平和が確立されるだろう。

（くぼた・はちろう／ノンフィクション・ミステリー研究家）

●話題の文芸書――新人物往来社

死にとうない

堀和久　一、四〇〇円

天下を賭けた男たちの闘い！

歴史読本セレクト **“中国史シリーズ”完結!!**

〈三国志ファン必読!!〉

定価1500円〈税込〉

❶三国志の英雄たち

天下を三分して激突した群雄たちのドラマ

<対談>三国志の魅力とは何か
陳舜臣vs尾崎秀樹

劉備、関羽、張飛、孔明、曹操をはじめとする英雄列伝。特別企画／三国志人物事典ほか

定価1500円〈税込〉

❷中国の名将と名参謀

四千年の歴史を動かした“決断”と“智謀”

<対談>名伯楽の条件
山本七平vs駒田信二

太公望と周公旦、桓公と管仲、劉邦と張良等の人物列伝。特別企画／中国故事名言集ほか

定価1500円〈税込〉

❸三国志の軍師諸葛孔明

不世出の天才軍師の智略と生涯

<対談>三国志の表と裏
陳舜臣vs狩野直禎

諸葛孔明激闘の譜、孔明の素顔、図説諸葛孔明の新兵器。特別企画／諸葛孔明の生涯ほか

東京都千代田区丸の内3-3-1 新東京ビル 〒100 **新人物往来社** 電話03-3212-3931(代) 振替〈東京〉6-151643